

学会通信(二〇〇九年二月～二〇一〇年六月)

◎学会活動

現代中国学会主催講演会

三月一六日「中国台頭の背後に―個人・共同体・そして国」許紀霖(中国華東師範大学歴史系教授)

◎学会員活動

川村亜樹「二〇世紀アメリカ文学のポリテイクス」(共著、世界思想社、二〇一〇年六月)

黄英哲「華麗島の冒険―日治時期日本作家的台湾故事」(共編、台湾麦田出版、二〇一〇年一月)、「跨界者陶晶孫の台湾観察―論『淡水河心中』」(学会発表、東南亜与東北亜―複線歴史与多元文化的再省思)學術検討会、二〇一〇年二月二二―二四日、於中国清華大学、「越境者としての陶晶孫―『淡水河心中』論」(『立命館文学』第六一五号、二〇一〇年三月)

高明潔「国際社会に向かい合う中国の民間組織」(報告、愛知大学国際中国学研究センター・北海道大学東アジアメディア研究センター共催、国際シンポジウム「現代中国の国際的影響力拡大に関する総合的研究」二〇〇九年十二月一九日、於愛知大学名古屋校舎)、「中国における多言語共生状態に関する一考察」(報告、愛知大学国際

問題研究所研究報告会、二〇一〇年六月、於愛知大学名古屋校舎)

砂山幸雄「並木頼寿氏の遺稿に寄せて」(『中国研究月報』二〇一〇年二月号)

薛鳴「在日中国人子女の言語使用意識とエスニシティ」(報告、「共同研究会 日本における移民言語の基礎的研究」二〇一〇年三月一九日、於国立民族学博物館)、「言語とコミュニケーション」(共著、好文出版、二〇一〇年三月)

馬場毅「中国の対外教育―孔子学院を中心」(報告、愛知大学国際中国学研究センター・北海道大学東アジアメディア研究センター共催、国際シンポジウム「現代中国の国際的影響力拡大に関する総合的研究」二〇〇九年十二月一九日、於愛知大学名古屋校舎)、「近代中国華北農村の水利組織と村落・宗教圏について―河北省邢台県を中心に」(論文、「愛知大学国際問題研究所紀要」第一三五号、二〇一〇年三月)、「小林一義著『中華世界の国家と民衆』上・下巻」(書評、『中国研究月報』二〇一〇年二月号)松岡正子「五・一二汶川地震後羌族民族文化資源的再建与創構―羌文化は怎樣被創構的」(基調講演、国立臺北芸術大学文化資源シンポジウム、二〇〇九年十二月)、「四川のチャン族―汶川大地震をのりこえて」(『Soc』2009) (共編、風響社、二〇一〇年三月)

中国21 Vol.34 予告(11年1月刊行予定)

特集●民族・国家・開発(仮題)

民族地区は、状況が見えにくい。事あるごとに情報が制限され、突然途絶えてしまうからだ。貧困解消をめぐった西部大開発がとなえられて十年、巨額の公的資金が投入された経済開発は、誰を潤したのか。民族自治区では、漢族が急増する一方で、少数民族が沿岸地区の都市に出稼ぎに向かう。漢族人口は、内モンゴルや寧夏では約八割に達し、新疆では一九四九年に一割にも満たなかったのが四割を超えた。政府は民族地区をどのような形に変えようとしているのか。二〇〇一年に改正された民族区域自治法では、公的機関の民族幹部枠が設けられるとともに、義務教育初期からの中国語教育が義務づけられた。国民教育の普及が着々と進められるなか、西の新疆や南のチベット、北の内モンゴルでは、厳しい監視体制のもと根強い不満と緊張が続く。Vol.34では、現場を知る気鋭の研究者が、開発をキーワードに、民族地区の現状と課題を分析する。

【論説】王柯、大川謙作、片岡樹、小島麗逸、シンジルト、田曉利、長谷千代子、星野昌裕、村上大輔、楊海英ほか